



マイム犬猫病院長
(射水市小島)
長井 崇典

近年、家猫が増えたため「皮膚にできものがある」と来院されるケースが増えました。「できもの」は、正式には「腫瘍」と呼びますが、診断するためにはその腫瘍に細い針を刺して細胞を採取し、顕微鏡を通して腫瘍か否かを識別する必要があります。

この検査においてしばしば「肥満細胞腫」という悪性腫瘍(がんの総称)を診断することがあります。名称から連想されるのか「太

猫の肥満細胞腫



猫の頭部の皮膚にできた肥満細胞腫

ったからこのできものができたのですか」と患者さんからよく質問を受けますが、実は身体の肥満が原因ではありません。「肥満細胞」は「マスト細胞」とも呼ばれ、アレルギーや免疫反応に関与する免

できものは放置しない

疫細胞の一種です。この細胞が悪性化し、増殖したものが「肥満細胞腫」と呼ばれるのです。

も緩やかなため外科的に腫瘍を切除することで大いに治癒が期待できます。

猫の「肥満細胞腫」は、皮膚に発生する「皮膚型」と脾臓や腸に発生する「内臓型」に分類されますが、発生率が高いのは「皮膚型」です。写真のように頭部に発生することが多く、鼻の付近や耳にもできるためやっかいな腫瘍でもあります。この腫瘍は1個だけ孤立して見える場合が多いこと、元気づくことなどから発見が遅れがちになります。悪性度が低く進行

一方、皮膚型の2割程度は、複数箇所にも腫瘍が発生すると言われ、脾臓に発生した肥満細胞腫が皮膚に転移した可能性がある場合は要注意です。なぜなら、内臓型の肥満細胞腫は進行性で悪性度が高く、嘔吐や下痢、食欲低下、体重減少といった苦しい症状を伴うからです。発見時には、肝臓やリンパ節、皮膚などへ転移していることもあります。そのような場合でも、腫瘍に侵された脾臓を摘出

することで生存期間を延ばせることが多いとされています。犬にも同じ腫瘍が存在しますが、そのほとんどが皮膚に発生するため、治療の第1選択は猫の場合と同様に外科切除となります。体表にできた腫瘍が悪性腫瘍とは限りませんが、もし悪性であれば、放置により進行することが多いため「できもの」の早期発見、早期治療をお勧めします。

ところで、ワンちゃんネコちゃんとのスキンシップをどのくらいなさっていますか。十分に触れ合うことで信頼関係を深め、小さな異変を見逃さず、大切な伴侶動物の健康を長く保ってあげてほしいと心から願っています。

毎月第1土曜掲載